
ARTIFACT

シェイド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A R T I F A C T

【Nコード】

N 1 6 0 1 C

【作者名】

シェイド

【あらすじ】

選ばれた能力者たちと、それを指揮する黒幕。能力者たちは戦い合って何を得るのか。そして指揮者の正体とは――。

序章「変化」

昨日、俺は超能力者になった。と、友達に言ったら笑われた。親に言ったら頭の心配をされた。別に冗談を言った訳でも、気が触れたでもない。

俺は間違い無く、普通ではない、特異な力を手に入れてしまったのだ。

その原因は、今は置いておこう。それよりも今、現在のことを考えなければ。

過去を思い起こすだけなら、死ぬ間際でも出来る。それに、今の状態を考え、乗り切らなければ、俺は死線を越えてしまうかもしれないのだ。

五月一日、十七時十八分。

——俺は今、異形の怪物を目の前に、丸腰で立っている。

「そろそろ観念したか？　へっ、お前みてえな雑魚が最初の相手で助かったぜ」　狼とも獅子とも言えない怪物の声が、日の傾きだした山中に響く。

「くそっ！　行き止まりか」

15、6歳程度であろう、学生服を来た少年、二ノ宮^{ニノミヤ} 瑠色^{ルイ}が、高くそびえる切り立った崖を前に落胆の声を上げた。

「ふん、お前の力は知らんが、使わないってことは大した能力じゃないんだろ？　このまま倒してやるよ。俺の『変化』の力でああ！」

怪物は数m離れた場所から、溜色に飛び付いた。

怪物の右前足が溜色の眼前まで迫ったが、寸でのところで身体ごと飛び退き、かわした。

「うあっ！」

飛んだ衝撃で三回転し、放り出される。

「しぶといガキだな。だが今度は後ろが谷だ、落ちれば絶対に死ぬぜ」

舌打ちを一つし、怪物はこれ以上逃げられぬよう、回りこみながら近付く。

「昨日からの耳鳴りと頭痛がやっと治まったのに、今度はいきなりこんなことになるなんて……。能力ならずと使ってるさ、お前から逃げる方法を考え続けてる」

荒い息を押さえ付けながら、溜色は小さな声でぼそぼそと喋る。

「ああ？ 聞こえねえぞ、何言ってるんだ？」

様子を窺い、ゆっくり歩み寄りながら、怪物は問うた。

「お前から逃げる手段を想像し続けてたって言ったんだよ」

その台詞と同時に、溜色は後ろに跳んだ。十数mはあるだろう垂直に近い谷のような崖に向かって。

「なっ！ ……お、落ちやがった」

怪物は崖下を覗きこむ。所々、樹木がありよく見えないが、下はごつごつした岩石の集まりのようだ。

「頭イカれてやがんのか、あのガキ。くそっ、力は奪えなかったか。」

まあいい、死んでるのは間違い無いだろうしな」

怪物は一瞬のうちに元の人間の姿に戻った。その男は踵を返して山を下る道に進んだ。

——ガサツ、と僅かな音が崖下から聞こえたが、男の耳には届かなかった。

二章「想像」

「ふう、どっか行っただな」

崖の中腹、木々が倒れて引つ掛かり、木の葉のクッションとなっている地点に瑠色の姿はあった。全身打撲と擦り傷だらけ、整えていた黒の短髪もくしゃくしゃになりながらも、確かに生きていた。

「いってえ。一番ダメーじ少なそうなの選んだのに。何だよ、『想像』なんて全然使えねえじゃんか」

瑠色はぼろぼろになった学生服と、擦り傷ばかりの自分の手を見る。

「……つうか、どうやってここから降りよう」

木々が重なっているとはいえ、まともな足場などは当然無い。今でも少し動いただけでずり落ちそうなくらいの状況だ。

「えらく困ってるみたいだな、助けてやろうか？」

どこからいつのまに現れたのか、瑠色の目の前にうさぎの人形が浮かんでいた。おまけに喋った、中々渋い声で。

「あっ！ お前、昨日のやつ！」

瑠色はうさが浮かんでいることにも、喋ることにも驚かなかった。昨日一度驚いているからだ。そして、この縫いぐるみこそ、瑠色が災難にあった原因だ。

「昨日のやつ？ 失礼な、昨日も言っただろ、俺の名前はビートだ。そんな態度じゃあ助けてやらないぞ」

ビートと名乗った真っ白な縫いぐるみはぷかぷか浮かびながら、瑠色の周りをうろちろしだした。

「助けろよ！ 大体、お前のせいでこんなことになったんだぞ」
溜色は首をビートに合わせながら動かす。

「俺のせい？ 違うね、俺はただの使い魔だ。命令に忠実に動いてるだけさ」ビートは動きを止めた。

「まあ、今回は特別に助けてやるよ。ほら」

瞬間、ビートの体から光が放たれた。その光は溜色の体を包み、崖上まで軽々持ち上げた。

「……こんなことができたのか。縫いぐるみのくせに」
溜色は立ち上がった。案の定、節々に痛みが走った。

「全く、次は助けんぞ。それより、昨日は『想像』の能力を渡しただけだったな。詳しい説明をしてやりに来たんだ、有難く思え」
崖上まで滑るように飛んできたビートが口を出す。

「ほとんど無理矢理渡されたけどな」
溜色がビートをにらみつける。

「仕方ないだろ、お前は選ばれたんだ。嫌でも受け取ってもらうさ。とにかく、説明を始めるぞ！」

三章「説明」

「まずは能力についてだ。ちなみに能力は総称して“アーティファクト”と呼ばれている」

「あーていふあくど？　どういう意味だよ」

中学生で尚且つ英語が苦手な溜色の辞書に、その言葉は載っていないかったようだ。

「意味？　英単語としての意味は加工品とか、そんな感じだ。そんなことより、お前の『想像』能力のことを教えてやる」

「加工品？　意味が解んねえ」

溜色はその場に座りこんだ。話が長引きそうな上に、体が悲鳴を上げていたからだ。

「『想像』は物事のパターン全てを瞬時に考え出し、想定する能力だ。これによって、相手の攻撃パターンを『想像』し、回避、反撃に繋げることができる」

白兎は溜色が座ったのを見て、目線を合わせるべく下降しながら語りを続ける。

「ちょっと待て。ってことは、僕の能力は考えるだけってことかよ」
溜色は眉間に皺を寄せて、ビートの右耳を掴んだ。

「まあそうだが、お前の能力は強いぜ、俺が保証する。その理由は今は言えないがな。というか、離せ。ちぎれたらどうする」

ちぎれることを恐れ、動かない白兎は可愛らしいフェイスで渋く凄んだ。

「あ、悪い、つい。僕、人形とかすぐ壊すタイプだから」
本人にはそのつもりはないが、この発言に、ビートは恐怖と戦慄を感じた。

「……そして、能力者の義務についてだが、他の八十四人の能力者を倒して力を奪うことだ。奪い方は相手を倒した後、相手に触れながら、力を奪うとお前が思うだけでいい。尚、能力者は全員、日本にいる」

ビートは早口でまくし立てる。恐らく、溜色の近くから離れたたい一心なのだろう。

「そ、そんな早口で言われてもよく解んないんだけど」
流石に溜色も困惑の表情だ。

「あ、あと一つ。『結託』という能力があり、それは能力者全員が使える。能力者二人以上が集まった状態で、それぞれが『結託』すると認識すればいい。その能力は使えば分かるが、必ずしもやる必要はない。何せ能力者は全員敵だからな」

先程の速度を上回るスピードで、息継ぎも無しに言い切る。水泳でもやれば中々、上を狙えそうだ。……人間ならの話だが。

「ひ、必要最低限は伝えた。俺は帰る、じゃあな」

そう言って、呆氣にとられている溜色の前から逃げるように、白いものは消え去った。

「……だから、早すぎて解んねえんだよ！」
いつの間にか日は落ち、暗闇となった山中に、溜色の叫びだけが残りました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1601c/>

ARTIFACT

2010年10月12日00時03分発行